

風韻(3) 『14歳からの哲学』と『41歳からの哲学』

新井 俊郎

『14歳からの哲学』(2003年3月刊・トランスビュー社)と『41歳からの哲学』(2004年7月刊・新潮社)がいま静かなるブームを引起している。を知ったのは今年の3月で地元の本屋の哲学コーナーに平積みになっていた。しかも、30冊ほどが高々積まれて辺りを圧倒していた。孫に贈ろうと思って、一冊買って帰った。『14歳から』と言うんで、最終章から読み始めた。『30 存在の謎[2]』からである。

「存在する」ということは、奇跡だ。存在する限りあらゆることが奇跡でありしたがって謎なのだといふ絶対の真理を手放さないのであれば、君は、これからの人生、この世の中で、いろんなことがあるけれども、悩まずに考えてゆくことができるはずだ。そのためにこそ、人間には、考える精神があるんだ。……真理は、君がそれについて考えている謎としての真理は、いいかい、他にもない、君自身なんだ。君が真理なんだ。はっきりと思い出すために、しっかりと感じ、そして考えるんだ。」

これが終章の最期の段落である。著者は池田晶子という弱冠44歳の知的な顔立ちをした才媛である。

逆説的にいうと、の方が難しい。は昨年(2003年)の5月から『週刊新潮』に連載しているもので、1年分を冊にした。大人向けにややレベルを下げて書いている。少年少女の清新な頭脳に期待するほどには、錆付いた大人の頭脳には期待しかねたものらしい。平たく言えば、は課題で、は例解である。あるいは、は公理、定理で、は問題を社会の事件や事象にとって、この解答を与えている。だから、大人は断然、から読むべきである。勿論、から読んだってかまわない。

ひととおり両方読むことだ。読んで終りとせず、の往復読みをすることだ。出来ることなら30分でいいから毎日続けてやって見たらどうかな。長年の間に、頭脳の錆付いた大人諸君よ、戦後民主主義の教育を受け、寸毫もこれを疑わなかった大人諸君よ、哲学をもたぬ大人諸君よ。

樹が枝葉根幹からなれば、根幹に沈潜して現出する出来事や事象の本質を見抜く、考え抜くのが、哲学であろう。ところが、持たねばならぬ哲学の一片だに、持つことなく、事件の表層のみを追って、がやがやざわざわ風に騒ぐ枝葉のようにひたすら喧騒なのが、マスメディアである。オリンピック報道然り、イラク戦争然り、靖国問題然り、教育問題然り、憲法問題しかり……。

こんな時に、瑞星のように現れたのが池田晶子である。少年少女を相手に誠心誠意、人生に対する疑問を投げかけている。けして解答を与えてはいない。ただ、自ら考える精神がいかに大事なことかについて、手を取るよう語りかけている。昔のギリシャにおけるソクラテスのように。

哲学は一見無用の長物にみえるが、事実、哲学書をいくつ読んだって、生活の資にはならないが、本質を見抜く眼を養ってくれることも確かである。強いて生臭い例を挙げるなら、新技術開発、経営のノウハウ創造、読書法の開発、営業のノウハウ開発、組織における自由の取得、などと幾らでも挙げることが出来る。しかし、これらを目的にして、や、を読んでも目的は果されまい。己とは何者かを考えつめるのが哲学だとすれば、この過程において自然これらのものは身につけてくるものなのだから。

(2004-8-19)